教育現場訪問❶

山口県立山口農業高等学校／環境科学系

学校で学べないことが学べた

～平成十三年度建設産業人材確保・育成推進キャンペーン中国ブロック会議～

平成十三年十月二十三日、ぱるるプラザ山口で、建設業の次代を担う優秀な人材を確保・育成するための中国ブロック会議が開かれました。　会議のなかで、建設業協会の協力で七年前からインターンシップ制を導入している山口県立山口農業高校の人材育成への取り組みが紹介されました。

山口農業高校の取り組みを報告したのは、中村雅彦教諭（今年から県立田布施農業高校環境土木科長）と山口農業高校環境科学系二年の沖元翼君、受け入れ企業の立場からシマダ株式会社建設事業部部長の三浦政則氏の三名です。

中村　雅彦
山口県立田布施農業高等学校
環境土木科長

「学校で学べないことが学べた、最先端の技術や機械を知った、社会人と一緒に仕事ができた、教師と違う指導、人生観に触れることができた」実際に将来を考えて入学してくる生徒はほとんどいない現状のなかで、生徒が初めて自分の適性や将来について考えるきっかけになっているようですと話す中村先生。三年生の面接で聞くと、三年間の思い出として修学旅行とインターンシップ制を挙げる生徒がほとんどです。学校と違う体験をしたということが子ども達にどんなに大切かを実感します。

「この道路はぼくが作った」と誇らしげに言うんですね（笑）。

ほんとはほんの少し手伝わせてもらっただけなのに。

また、「挨拶をしない、元気がない、何を勉強しているかわからない」など、受け入れていただいた企業さんからのお叱りもあります。学校で何をやってるのか生徒に聞いてもわからないから授業計画を持たせてもらえないかといわれたこともあります。受け入れ企業の皆さんにはご迷惑をおかけしますが、進路指導や生徒指導の面からも地域企業の教育力は大きいのです。インターンシップ制を導入する学校がこれからも増えていくと思われますが、こうしたプラスマイナスだけでなく、生徒が確実に変わるということですね。

それから最後になりましたが、生徒を送り出す学校としても生徒も一番不安なのはケガです。今まで七年間一度も事故や小さなケガすらなく、安全管理のもとに研修させてもらえていることにお礼を申し上げます。

沖元　翼
山口県立山口農業高等学校二年

続いて今年の八月六日から四日間、現場実習に出た同校二年の沖元君が報告しました。

学校では習得できない実践的な実習体験、自己の進路意識を高めること。これが実習に当たっての僕たちの目的でした。

僕は八月六日からの研修に参加し、初日は工事の説明と光波測量の補助、二日目は測量の結果をコンピューターに入力。学校には最新の機械はなくずっと細かな計算をするんですが、こうした授業との関連が初めてわかりました。

授業の一時間一時間を大切にしなければと思いました。三日目は工事現場の見学。二カ所を回り、作業状況について説明。

四日目は実際に現場で丁張りの設置（杭打ち）。丁張りが終わったときは達成感がありました。午後には最初にやった測量の縦断図と横断図を製図用紙にプリントアウトしました。

この四日間は、私にとって土木の魅力を知ることができた有意義な時間でした。この時の担当者の言葉が私の目標となりました。

それは「作った人にしかわからない達成感」を感じたいということです。クラスのみんなにもそれぞれ実習の感想を聞いてみました。『今まで何気なく見ていた道路工事への見方が変わった』『実習はつらかったが楽しかった』『自分の勉強不足を感じた』『授業をまじめに受けねば』『プロの仕事を見ることができてよかった』など、それぞれ何かを得たようです。終わりに、お忙しいなかをご迷惑おかけしました。有意義な実習をさせていただいてありがとうございました。

最後に受け入れ企業の立場から、八月六日からの四日間、三名の生徒を受け入れたシマダ株式会社の三浦政則氏が報告しました。

三浦　政則
シマダ株式会社
建設事業部

「通年ですと一人一人違うんですが、今回は三人とも同じ現場で実習してもらいました。今年の夏は特に暑くて大変でしたが三人とも頑張っていました。

最初の三日間は、現場の概要の説明と安全の決まりを知ってもらい、測量のやり方、写真撮影の補助をやってもらいました。四日目はパソコンでCADの研修と生コンの現場を見学してもらいました。実習生の心構えは年によっても違うのですが、今年の三名は建設関連で働きたいと言っておりました。

今は大学生もインターンシップで来ていますが、自分の進路を考えるいい機会だと思いますね。

ものを作るには苦しさ、辛さがあります。でも、どんなに小さな仕事でも一つのことを成し遂げたやりがい、自分が得た達成感は何物にもかえがたいものがあります。

こうした気持ちを次の世代に伝えていきたいと考えています。」

教育現場訪問❷

山口県立宇部西高等学校／土木科・造園科

それぞれの場所に合わせた工事方法を

～急傾斜地の崩壊防止工事と沖合人工島造成～

説明を受ける宇部西高生

平成十三年八月、山口県立宇部西高校環境緑化系列の生徒三十七名が、下関市での現場見学会に参加。猛暑のなか幡生町の急傾斜地崩壊対策事業の現場と垢田の沖合人工島の見学を行いました。

「土木の子はもちろん造園を勉強する子にとっても、緑化などの現場を知るいい機会なんです。学校では学べないことを実地で見て知ってほしいですね」と引率の山崎盛敏先生。

下関市幡生町の一帯は崩壊危険区域に指定されており、梅雨や台風のたびにがけ崩れなどの被害が出ています。ここでは、従来のようなコンクリート建造物をできるだけ使用せずに斜面を緑化していく環境共生型の対策工事が行われていました。

住宅がすぐ下にある急傾斜地のため現場は狭く、ほとんど人力で作業が進められ、レンジャー部隊が使うロープのようなものが斜面に沿って何本もぶら下がっていて、一人一人がその綱を腰に留めて昇降しながら作業を行うのだそうです。「こういう狭い急傾斜地では、機械施行は将来的にも難しい。人力でこれからもやっていくことになると思います」と施工者の日特建設さんが説明します。

「あのロープで実際に傾斜を昇ってみたかったなあ」とにっこり。宇部西の女生徒のみんな、なかなか元気です。

急傾斜地の現場

昼食をとった後、一行は下関市の沖合に建設中の人工島を見学しました。平成八年から始まった工事は順調に進んでおり、現在は作業基地を囲む護岸工事と約六百メートルの道路、五つの橋梁が出来上がっていました。

午前とはうって変わっての大規模な工事に、家業の大工を継ぐという土木の三年生、山崎康雄君は「あんなに機械を使ってもやっぱり人の手が必要なんだし、ああいう大きな工事のやり方を考える人もすごいなあと思います。学校で習ってああすればこうなるというのはわかっても、実際には経験がものをいうんだなあ」と、土木・建築における"人の力"の大切さを改めて実感したようでした。

沖合人工島の橋梁群

け・ん・せ・つ WOMAN

大きな機械を動かすのが大好き！

西川 敬子さん

KEIKO NISHIKAWA ●勝井建設株式会社（岩国市）
●昭和54年生、山口県岩国市出身、県立岩陽高等学校普通科卒業●O型、魚座

勝井建設株の資材センターでは、資材の移動にクレーンが動いていました。運転していたのは西川敬子さん、22歳。重機運転が大好きな、元気いっぱいのヤンママです。

とにかく大きな機械が大好きで、トラックやクレーンを動かしてると楽しくて。高校は普通校だったんですが、学校に来ていた求人で重機のオペレーターの職種があって、建設だけど女子でもよかったんです。それで決心して入れてもらいました。

入社して1～2年の間に玉掛技能講習、移動式クレーン運転免許、大型特殊免許、車両系建設機械の資格を取りました。会社から講習とかに行かせてもらえるんでありがたかったです。運転手としてどうしても必要な資格だから、私もできるだけ早く取りたくて。今ですか？今ねらってるのは大型トラックの免許なんです。前に取りそこねちゃって。普通のトラックなら運転できるんで、それで資材を運ぶ仕事があるとうれしい（笑）。

山道とかをどんどん行きます。クレーンも大きい方が好きだな。あ、道路工事で道をならして行ったり来たりするローラーも動かしたりしますよ。20歳で結婚したんで、女の子がいるんです。仕事と家庭の両立は大変だけど、もともと体を動かすのが好きだからあんまり気にならない。独身時代は親がやってくれたのでぼーっとしてた時間を、家事にあてればいいわけだから。家事よりも仕事の方が好きですけどね（笑）。

現場では、女だからというので可愛がってもらえて得してるかな。将来はもっと大きな機械を動かせるようになりたいし、仕事はずっと続けたいと思います。